

北の鉄道風景

Train number; 4007D

2023.12.15 16:55

1/3, f/6.3, ISO 200, f=200mm, Daylight/Sunny

4912×7360 Raw

第129回

ホンモノのクリスマス

クリスマス飾りがまばゆい銀座の真ん中に五歳の私はいた。驚きと戸惑いと興奮が一気に押し寄せる、生まれて初めて味わう空間だった。ひとときわ輝くドアを開ける。見たこともないようなおもちゃが広がっている。至福の逡巡^{しゆんすん}が私を襲い、最後に「これッ」と指をさす。それが私の記憶する最初のクリスマスプレゼントだった。

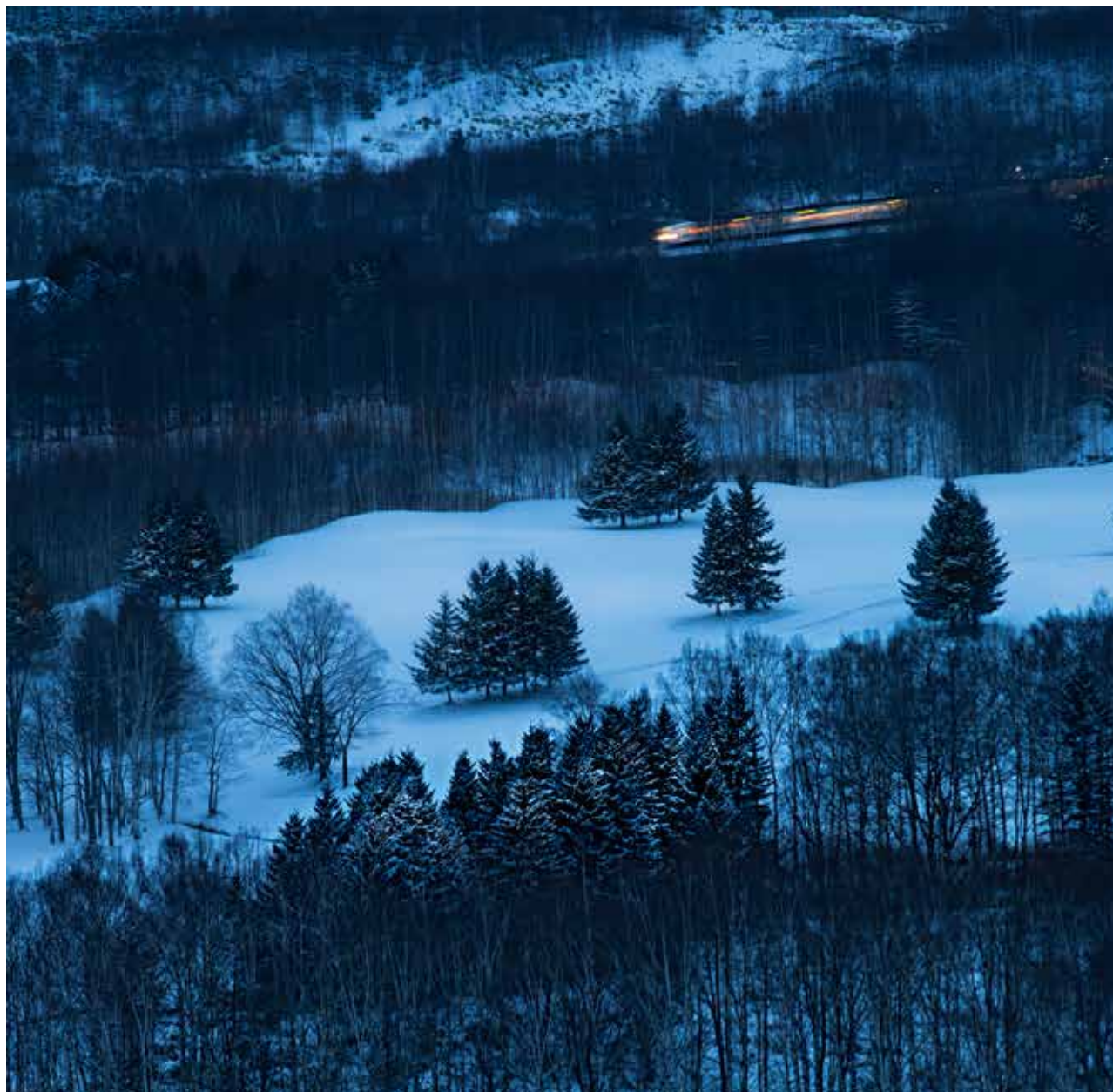
以来、十二月になると私の頭はクリスマスに短絡するようになったが、成長するにつれ欧米の二番煎じ商法に乗

せられているだけではないか、といった批判精神も芽生え、何よりも、プレゼントを交換したり一緒に食事をする相手などおらず、そんな時間があつたら、雪の山で写真を撮るほうに喜びを感じるようになっていった。

雪山写真の最高のモデルだった蒸気機関車が消えてしばらくした頃、アメリカで仕事をするようになった。当然同僚は皆アメリカ人だった。何かの拍



静まり返った夕暮れ、客車の窓明かりを連ね、軽い息遣いで通り過ぎるクリスマス・トレインの普段着姿に、かえって本物を感じた。Hocking Valley Scenic R. 1986



写真と文＝眞船直樹

子に、何月が一番好きか？という話題になった。私以外の全員が十二月と答えた。クリスマスがあるからだということはすぐ分かった。非常に不真面目なクリスマスチャンだと自嘲しながら、クリスマスはいい、家族がみんな揃うからと遠い目をして繰り返した。

秋が深まり、ハロウィーンのお祭りが去り、感謝祭を終えた翌朝、世の中が一変していることに気づいた。生活のすべてがクリスマスに向けたものに変わっていたのだ。街もテレビ画面もチラシもファッションも深緑と赤の装飾をまとうようになり、その日に向かっていった。

私は驚きそして納得した。生活のすべてがクリスマスになるのがクリスマスだったのだ。それぞれが本物だと言わんばかりの匂いを持っていた。その中でクリスマス・トレインもごく自然に走っていた。家族で楽しく乗り、それに手を振るのがマナーだと言わんばかりの雰囲気の中で、カメラを向けるのは私一人であることに恥ずかしさを感じながらシャッターを押さなければならなかった。